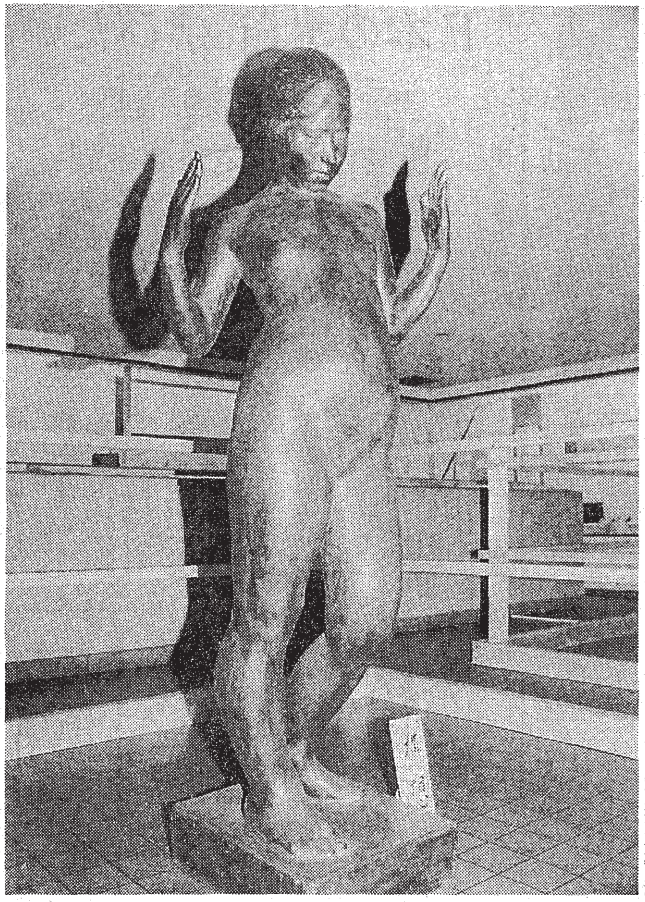
政宗騎馬像余話

小室 達・日記から

▷ ③



大正十四年、第六回帝展で「構想」が特選になり、「若き天才彫刻家現る」と旋風を巻き起こした。「構想」は柴田町槻木小、中学校にある

後に伊達政宗騎馬像の制作者に選ばれる小室達は大正十四年、第六回帝展（現在の日展）に出品した「構想」が特選となり、「若き天才彫刻家現る」と美術界に一大センセーションを巻き起こした。翌年からは帝展無鑑査となり、美術界で確固たる地位を築いた。二十七歳の若さだった。

この美術界のエリートは一体どんな青春を過ごしたのだろうか。今でいうオール5の優等生だったのだろうか。いや、その逆だったのだから面白い。

「小室君は、年は私より二つ多い。（旧制）白石中三年生の時に、小室君が落第して一緒になった。当時の中学校は厳しかったからね。冬の寒い日に理科の実験をすると、小室君は実験を私に任せて、アルコールランプにあたっていた。油がなくなると〝先生、おらほのさ、油入っていません〟と言ったり、ちゃめっ気のある人だった。試験の時には白紙で出して〝わがんないんです〟と言って部屋を出て行ったこともある。成績は一番下だったかもしれない」

旧制白石中の同級生で元大河原町教育長の鈴木仁さん（八七）＝大河原町西原前＝が語る小室にまつわる思い出話である。

落第生から首席へ

学校側では成績の上がらない小室にしびれを切らして卒業させたらしい。が、当の小室は「おらは卒業させられなくたって、美校（東京美術学校、現東京芸大）の入学許可が届いてっからいいと語っていたという。現在の学校教育や大学入試を考えると、信じられないようなおおらかさではないか。そんな小室も、こと彫刻となると早くから異彩を放ち、数々のエピソードを残している。

「たばこ入れに付ける小さなしゃれこうべをケヤキなどで丸く作っていた。数学の授業の時、先生の話は上の空で品の油で磨いていたら、先生に見つかってしまった。〝おお、いいもんだなあ。おれさけろわ〟と取り上げられ、〝ああ、いたましかったとほやいていた」

「皆が（寄宿舎で）寝るなどとく作っていた。数学の授業の時、先生の話は上の空で品の油で磨いていたら、先生に見つかってしまった。〝おお、いいもんだなあ。おれさけろわ〟と取り上げられ、〝ああ、いたましかったとほやいていた」

時に一人起き出して、布団の中で観音さまを彫ったり、図書館から人体の本などを借りてきて筋肉の様子などを調べていたねえ」

小室の才能はすぐ学校中に知れ渡り、学校の事務室で使う「県立白石中学校之印」や「県立白石中学校之印」などの印鑑を彫り上げ、プロ顔負けの出来栄えでびっくりさせた。運動会に飾る万国旗の版木を三十種類も作ったが、この版木は昭和の初期まで使われていたという。

旧制中で落第坊主だった小室は、東京美術学校に入るとその天与の才能を花開かせ、大正十三年、彫塑科を「首席」で卒業した。現在、美術関係の入試で最難関の芸大を、である。今、小室のような才能を持った少年がいたら果たして世に出ることがあるだろうか。

小室の親友、故佐藤忠太郎は「白高七十年史」に次のような一文を寄せている。

「彼（小室）の青春期を省みて、母校の先生方にも希望がある。成績のよい生徒が必ずしも出世したり、母校愛に燃えるものではなく、逆の方がむしろ多い。余りカタにはめないでむしろ天分をのばしてほしい。低空飛行でやっと卒業して郷土の工芸復活に一生を捧げる運命になった私も実は親友小室君の影響が大きいのである。出でよ芸術家！育てよ母校の先生さん！」

答案用紙は白紙

みやぎ路

河北新報　昭和62年(1987年)5月9日掲載